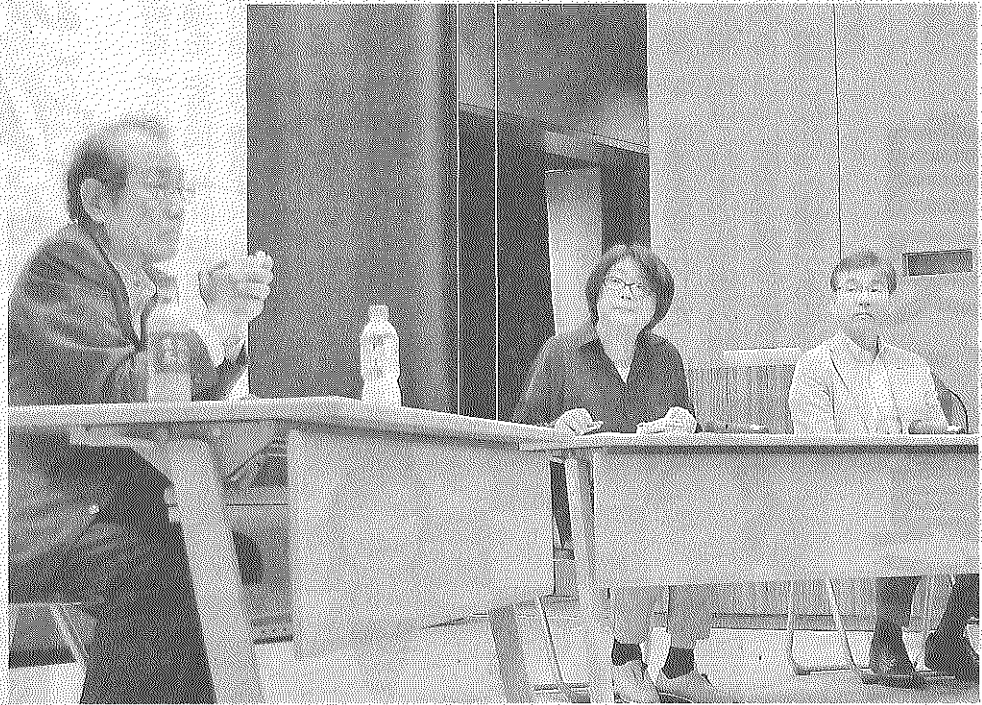


「私たちに何ができるか」

虐待防止シンポジウム 講演者 杉山さん

パネルディスカッションで意見を交わす杉山さん(中央)と
峯本さん(右端)、進行役の松浦さん



虐待死事件の背景探る

中央区



虐待問題に理解を深める「こども虐待防止シンポジウム」が

中央区大手前4丁目の大阪歴史博物館で行われた。ルポライターの杉山さんが講師を務め、2000年の14年の虐待死事件の取材を振り返り、親の抱える生きづらさを紹介。「家族の責任を問う前に、私たちに何ができるかが問われている」と訴えた。(山本圭介)

シンポジウムはNPO法人関西こども文化協会(中央区)が行い、約200人が参加した。

杉山さんは、2000年に愛知県武豊町で3歳女児が餓死した事件や、10年に大阪市西区で3歳と1歳の

姉弟が餓死した事件のほか、14年に神奈川県厚木市で5歳男児の白骨遺体が見つかった事件の経緯を説明した。

虐待をした親の共通点として、①子ども時代の孤立②繰り返し被害体験に遭った③社会への不信任④価値がないというおびえを抱いている―ことを挙げた。

「(こうした親が抱える)格差社会の中ですべり落ちていく不安に私たちは意識を向ける必要がある」と指摘。また子育てがうまくできない親に対して不寛容な社会では、親自身がつまずきや課題を隠すところでした。

さらに虐待の原因を巡り親だけ責める姿勢では「国や社会の責任が見えにくくなる」といふことを刺した。「家族の責任を問う前に社会の責任を考えないといけない。家族の形が多様化し、私たちに何ができるかが問われている」と投げ掛けた。弁護士の本間耕治さんと同協会理事長の松浦善満さんを交えたパネルディスカッションも行われた。